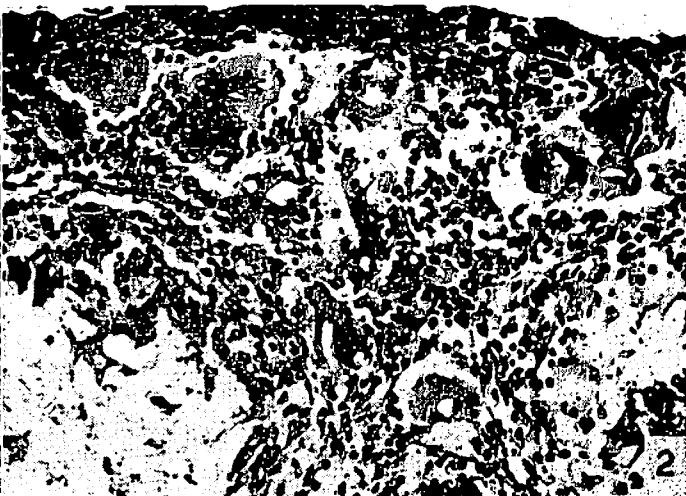
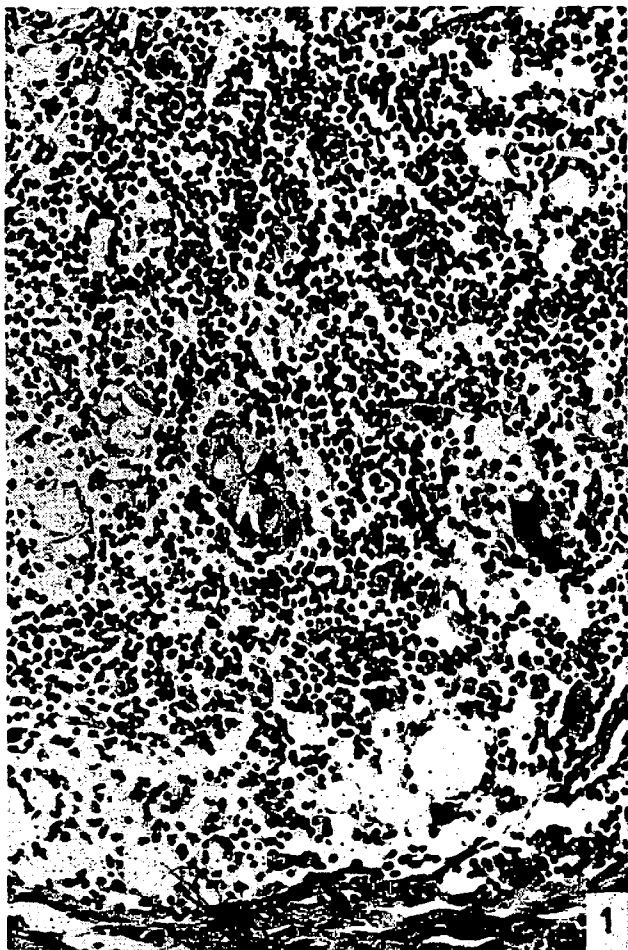


牛乳房における Nocardiosis 様病変

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第8回獣医病理学研修会 標本 No. 110



1967年夏季、岩手県の北部地方に放牧中の未経産牛に一種の乳房炎が多発した。それらのうち、代表的な7例の乳房材料を検索した。乳房炎の病因解明のため、病原検索結果の重要なことは論をまたないが、病理学的には一応、ノカーディア病と診断される所見を具えていた。本例はホルンタイン雑種、18カ月令のもので肉眼的に、左前乳頭は腫脹硬結し、同部の乳房は手拳大に腫脹し、内部に硬結部を触れる。この部の皮下に約2cmの厚さにわたり、臄様の硬結組織がみられ、さらにその深部に鳩卵大の膿瘍を形成する。これは内部に緑黄灰色の濃厚粘稠膿を入れ、周囲に厚い結合織膜をめぐらす。

病理組織学的所見：とくに注目されるのは乳頭粘膜下の肉芽腫性増殖とともに、乳腺部における腺胞ないし小葉性肉芽腫病巣の形成である。その構成要素はリンパ球、プラズマ細胞、類上皮細胞あるいはラ氏型巨細胞などで、毎常少数ながら好酸球を混じる。かかる細胞増殖巣の周縁には線維細胞および線維が粗に配列し、細胞巣を包囲する。図1は乳腺部における肉芽腫を示したもので下端に線維組織の一部がみえている。図2はとくに類

上皮細胞や巨細胞の密集部を示し、図3はラ氏型巨細胞の拡大図である。なお、写真にはみられないが、一部において肉芽腫巣の中心部に近く、好酸球の浸潤とともに、ヘマトキシリン・エオジン染色で紫赤色に染まる菌芝様物も認められた。このものはPAS、抗酸染色ともに陽性を示し、グラム染色ではごく一部のものに多形性の陽性物質が認められた。また、肉芽腫病巣における類上皮細胞ないし巨細胞あるいは膿瘍壁に多数存在する組織球様細胞内にPAS陽性で弱抗酸性を示す球菌または桿菌状あるいは塊状物質がみられた。このほか、一部の乳頭粘膜や同部の頰廢物内にグラム、PAS陽性で弱抗酸性を示す分枝状線条物や上記と同様形態の小体群が認められた。因みに、本乳房炎は種々の抗生剤その他によるあらゆる治療に抵抗し、膿瘍や硬結組織の形成を示したものである。病原検索の結果ではブドウ球菌が分離されたと言われたが、病理組織学的には従来示されているいわゆる肉芽腫性ブドウ球菌乳房炎の所見とは趣を異にしている。結局、以上列挙した諸所見を総合し、ノカーディア病と認めるのが妥当のように考えられた。